

## 俳人村山砂田男先生を偲ぶ

高橋 実

新しい年が明けて、村山砂田男先生の息子から父が昨年六月なくなったというおはがきをいただいた。一九二四年生まれだから享年九二ということになるだろう。そのはがきを手にして急に先生との思い出がよみがえってきた。村山砂田男先生、本名定男先生には様々な思い出が残る。

私が中学教師から高校教師として出発したのは定時制十日町高校田沢分校であった。その折、村山先生は定時制の教頭だった。夜会議がある時など、本校から車で十五分離れた分校にやって来た。

昭和五十六年、私が小千谷西高校に転勤となった時、今度は校長として仕えることになった。とりわけ昭和六〇年、先生が、小千谷西高校の校長として教職最後の年には、同じ職場で公私にわたりお世話になった。こうした職場でのつながりとは別に俳句の同好の師として趣味の方面でもお世話になった。同じ俳句を趣味として校長室に行って俳句談議に興ずることもあった。

先生の退職の年に出版された本が『小林一茶と越後の俳人』である。その出版記念会には百名を超える参加者があった。このとき読んだ先生の句を後日句集に載っているのを見つけた。

名残雪今朝積年のわが書出づ

という句だった。その本は今も私の書棚に残っている。そこにはその時先生自筆の次のような礼状が張り付けてある。

この度拙著「小林一茶と越後の俳人」出版につきまして、躊躇しつつもご案内を差し上げましたところ、予想外のご注文をいただき、恐縮しております。またさる二月二十四日の出版記念会も、出版そのものがおこがましいのに、本校の高橋実先生（牧之研究家として著名）を中心に先生方が立案計画され、小生の名簿より、案内させていただきました。お一人お一人を思い浮かべながら名簿に印をつけ、先生方がすべて手分けしてやって下さったものです。出版記念会も遠く東京、川崎市、佐渡、糸魚川

をはじめ、県内各地より百二名という多数の方々が万障繰り合わせて出席賜っての大盛會、身に余るお褒め、お祝いおことば、…感激いたしました。私のお礼の言葉も万感胸にしまったひどい顔で途切れちぎれのお礼の言葉でした（後略）

先生は、在職中は高等学校国語研究会の会長を務め、俳句の面でも日本俳文学会・俳句協会「万緑」「さざなみ」の同人、朝日新聞新潟版俳句選者、さらに俳誌「すな山」を主宰された。著書『俳句の周辺』で成田千空氏は村山先生を評して次のように述べる。

村山砂田男氏は中村草田男門下の俳人であり、俳文学者であり、教育者である。俳人としての氏は、その名の示す通り、草田男の俳句理念と作品に傾倒し、師の俳号の二字をもって俳号とした。砂田男の三つの専門分野は師と同じであり、この師弟は専門の世界において深く交感していたはずである。

先生は温泉で知られた松之山町（現十日町市）橋詰に出生する。最初の句集は「山の音」。それについて先生は言われる

「山の音」という句集名は、ノーベル文学者である大文豪、川端康成氏の名作であり、おこがましいこと甚だしく、ただならずためらいましたが、松之山という超豪雪山間僻地での記録は、わたしにとってかけがいのないものでありましたので、こう名付けずにはおられなかったことをご賢察をいただきたいのであります。

（句集「山の音」あとがき 共文社 昭和46年）

そして、二松学舎大学を卒業、教職につかれて、そのほとんどを東頸城郡や十日町の定時制分校など教職のアウトサイダーを歩まれ、単身赴任が多かった。

独り居に献立はなし冷奴

冬夕焼濯ぎもの溜め男臭し

餅に懺怠惰の頃日句はせて

などの句は、その生活が実感される。

昭和六〇年、小千谷西高校で定年退職された。退職後は郷里松之山に帰られるのかと思って居たら、新潟市に住まわれた。それについて先生は次のように言われる

昭和六〇年、私は四百数十年におよぶ墳墓の地松之山を離れた。長男として大変な

決断であった。(村山砂田男集 ) あとがき近代文芸社1990)

この時の心境は次の句に表現される。

父祖の土捨てたる墓地のこぼれ萩

無月の庭遺影の父母に目が合うひぬ

鰯雲天へふるさと返しけり

晩年はさいたま市の施設に入所されていた。先生は俳人中村草田男に師事し、砂田男の俳号をいただいた。俳人としても、研究者としてもそして教育者として三つの専門分野を極められ、その輝かしい業績は多くの人に知られている。多くの著者も出された。とりわけ芭蕉や小林一茶や越後俳人の研究者として多くの著書に残されている。

句集に『いさご』(東京自楊社)「山の竹」(東京共文社) 『砂田男選集』(東京感動律社)『郷開』(東京近代文嘔社) 著書に『小林一茶と越後の俳人』(考古堂)、『越後の俳人』(私家版)『おくのほそ道一日本海紀行』(新潟日報事業社)。共著に『良寛のウィット』(考古堂)。『越佐芭蕉句碑を歩く、附越佐俳諧史』解説(新潟日報事業社)『越佐俳句歳時記』(新潟日報事業社) 編集顧問。

雪の中に生まれ、その中で生を紡いだ先生だった。

五日五夜降りつぐ雪遺志持つ雪か

父逝きて吹雪をとのはの挽歌とす

元日も吹雪けり僻遠三級地

雪国に雪降る常にあたらしく

父祖の地の雪降る限り雪おろす

先生の魂はあの雪の松之山に帰って行ったに違いない。先生の心からなるご冥福をお祈りしたい。